

香取遺産

Vol.108

圓生涯学習課

☎(50)1224

玉田神社の力石
六拾五メ目「持ち石」と
三拾六メ目「さし石」



▲玉田神社の力石5個

玉田神社は、大倉丁子に鎮座しています。祭神は、五穀と食物をつかさどる倉稲魂神で、この神は、『日本書紀』には伊弉諾尊と伊弉冉尊の子とあり、『古事記』では須佐之男命と神大市比売の子と記されています。

建久年間（1190～1199）に国分五郎大膳胤通が本矢作城築造の時に、北東の鎮として須久井に創建したと伝えられています。その後、寛文12年（1672）に徳川の旗本で領主であった坂部三十郎が現在の地に造営しました。『香取郡誌』には「信徒頗る多く常總二州の地に亘れり」とあり、篤く信仰されていたことがわかります。

力石は、江戸時代から明治時代にかけて各地で流行った力試しに使われたものです。玉田神社には、5個の力石が伝わっています。いずれも、花崗岩の自然石で、銘が陰刻されています。最大のものは、長さ70cmで、「六拾五メ目余

佐原伊能店佐兵工持之」の銘があります。また、長さ52cmのものには、「三拾六メ目さし石佐兵工」の銘があります。前者が「持ち石」、後者が「さし石」です。佐兵工さんが首尾よく持ち上げること、頭上にさし上げることができたので、重量と名前を刻み神社に奉納したものでしょう。ちなみに、65貫メは約244kg、36貫メは約135kgです。他は、長さ66cmで「奉納四十四メ目氏子中」の銘、長さ66cmで「二十五メ目」、長さ64cmで銘は磨滅のため不明です。

力石は、近世から近代にかけての庶民生活の一端を物語る貴重な証人です。しかし、今日までに失われてしまったものも多くあると思われます。玉田神社の力石は、昭和52年6月1日に市の有形民俗文化財に指定されました。

少し苔むして境内に置かれた力石から、声援や野次が飛び交った当時の様子に思いをめぐらせるのも良いでしょう。